

39 山幸彦のもくもく館 —日本の林業発祥の地にあります—

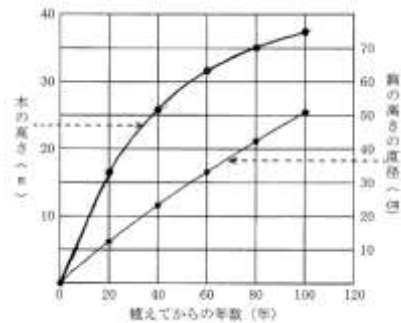
前にお話した宮滝の甌穴(おうけつ), 早速行ってきたのですね。「川の浸食作用の激しさに驚きました」という手紙をありがとう。私は、ここから少し川上にある「山幸彦のもくもく館」に行ってきました。

吉野杉をふんだんに使って建てられた別名を「川上村林業資料館」というこの施設には、種をまき、苗を育て、山に植えて大きく成長させるまでの様子が実物や映像で分かりやすく紹介され、吉野林業の歴史や現状を学ぶことができます。



入口近くに立っている約 1m の丸太は、林齢(山に植えてからの年数) 20 年生の杉の木で、平均の高さは 15.27m, 大人の胸の高さ(1.2m)の直径は 12.6 cm だそうです。ここから順に 40 年生, 60 年生, 80 年生のものが並んでいて、最後の一番太いものは 100 年生のものでした。展示されている資料から杉の木の成長の様子をグラフに描いてみました。

このグラフから、おじさんが生まれた年に植えられた 73 年生の杉の木の高さを求めると、およそ 34m, 幹の直径は 68cm となります。このように前後の様子から値を読み取る方法を内挿法といい、120 年生の杉の木の高さを求める



のは外挿法です。憲司君が生まれた年に植えられた木の高さを内挿法で求めてみてください。

このように成長していく杉の木ですが、そのためには多くの世話が必要です。まず、良い種を選んでまき、丈夫な苗を育て、山に植え付けます。そして雑草を刈り取って太陽の光がよく当たるようにしてやり、紐打ちという作業を行います。これは枯れ枝を払い、成長の悪い木を伐(き)り払う仕事です。枯れ枝を払うことで節のない木に育て、成長の悪い木を伐ることで林の中の通風をよくするのです。もう少し大きくなってくると、本格的な枝打ちと除伐が行われます。

伐採までの長い間、やさしく見守り、不要な枝を切るという厳しさは、自分の子どもを育てているように思えました。

見たこともない大きなのこぎりなどが展示されている所から2階に登っていくと、天井を張っていないこの建物の木組みの様子がよく見え、木造建築の構造を知ることができました。この後、2階の3Dシアターで、林業の実際の様子を立体的な映像で見せてもらいました。

ここには林業の発展に尽くし、日本の造林王と呼ばれる土倉庄三郎さんの業績や人となりについても詳しく展示されていましたが、このことについては次の機会にお話ししたいと思います。

(平成 21 年 10 月・中学校 1 年生の憲司君宛て)

スポットの案内

山幸彦のもくもく館は吉野郡川上村西河 486 にあって電話は 0746-53-2929、近鉄吉野線大和上市から奈良交通バス「西河」下車徒歩 4 分です。開館時間は 10:00~17:00、休館日は水曜日(祝日の場合は翌日)、入館料は 300 円、小・中学生は 200 円です。

理科のワンポイント「木造建築」

世界遺産に登録されている法隆寺は世界最古の木造建築物です。釘がまったく使われていないというわけではなく、昭和 23 年の解体修理で出てきた鉄釘 3 本は貴重な遺産として 1 本はフランスの「鉄の歴史博物館」に、残り 2 本は東北大学の博物館に収蔵されているそうです。

でも、今のようにボルトとナットで締め付けるのではなく、木と木をうまく組み合わせて建てているのが従来からの木造建築なのです。法隆寺や錦帯橋などの昔の建造物は木と木がうまく組み合わせてあります。つなぐにしても、台持継ぎ、鎌継ぎなどと呼ばれるつなぎ方でつながれています。そのため、乾燥や揺れによってゆるんでも、また、元に戻るという特性を持っています。法隆寺の棟梁・故西岡常一さんは「鉄を使ったらあかん。そこから腐る」ということばを残しておられます。

神戸市にある竹中大工道具館にはそうした木組みの展示があります。「自由にばらしたり組み立てたりしてください」ということでした。3 本の木が縦、横、高さの方向に組まれているものはなんとか分解し、組み立てることができましたが、6 本の木が格子に組まれているものは分解することさえできませんでした。

今、従来の工法の良さが見直され、東京スカイツリーの設計や施工にも生かされているそうです。

